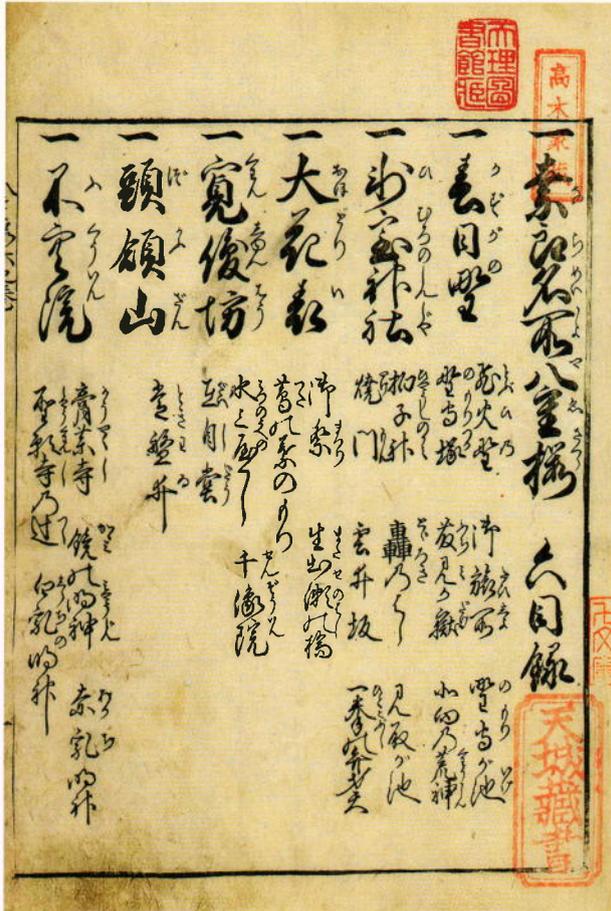


やまとの名品 天理図書館



ならめいしよや えざくら
奈良名所八重桜

延宝6(1678)年刊 12巻12冊

縦27.3cm 横19.1cm

奈良の名所案内で、市中の社寺縁起や古跡の由来が記されています。

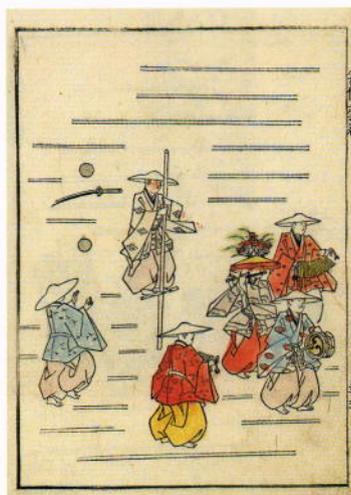
刊記に「江戸之住 大久保急鑑秀興／南都之住 本林氏伊祐兩作／江戸小傳馬町三町目柏屋仁右衛門開板」、序文に「むさし男初旅して奈良の京春日のさとに／知人有りて」とあり、大久保秀興が本林伊祐をたよつて奈良の地を探訪したことが成立の端緒のようです。ただ、大久保・本林共に資料に乏しく、素性が明らかにならないのに対し、各冊に複数付された挿絵は菱川師宣のものとは比定されています。

特に挿絵の多い巻六は「春日

野・水室神社・大花衣・寛俊坊・頭領山・不空院・岩瀨寺」

と項目をあげ、春日大社を取り巻く一帯の案内をしています。「大花衣」とは春日大社の一の鳥居のこと

とで、「毎年霜月廿七日春日御祭礼」として春日大社の撰社若宮のおんまつりの風流の次第を記し、現在も行われているお渡り式についても「世の人松の下の渡りといひなせり」とあります。この「松」はむかし春日明神が降臨され、萬歳楽を舞われたと伝えられる影向の松で、能舞台の鏡板に描かれる松の絵の



モデルでもあります。

今も芸能と縁が深いおんまつりですが、本書の祭礼図にも「細男」「申楽」「田楽法師」が描かれています。

今に通ずる記述も多い資料ですが、書名の奈良八重桜は現在奈良市の花に選ばれ、市内各所で花を咲かせます。

(天理図書館 近江めぐり)